

AIには考えさせられます

校長 武井 正明

通勤の車中で、何とも複雑なニュースが聞こえてきた。

外国の話だが、パートナーに先立たれた女性が、AIで理想的な男性を作り、なんと「結婚」した。AIのパートナーは、彼女の様々な悩みを親身に聴いてくれて、彼女は「彼」に全幅の信頼を置いているのだという。

少なくとも、彼女の心はAIの男性のおかげで満たされており、幸せな気持ちで毎日をすごしている。そして、誰に迷惑を掛けているわけではない。だから、彼女は自分の生き方に文句を言われる筋合いはない。家族がAIだろうが何だろうが、生き方は自由だ。

ただ私は、何ともいえない気持ちになった。

私が子どもの頃好きだった、松本零士の「銀河鉄道999」は、母親の命を機械化人たちに奪われた少年、星野鉄郎が、機械の体になって「永遠の命」を手に入れるために、謎の美女メーテルと宇宙を旅する、ロマンあふれる物語だ。

その鉄郎が、最終的に知るのは「生身の人間、命の尊さ」である。そしてメーテルと別れ、またひとつ、彼は大人の階段を上がっていく…。

車中のニュースを聞いていると、なんだか少年の時に感じた、そういう価値基準が、瞬時にひっくり返されるような衝撃を覚えた。

本当にそれでいいのだろうか…。

先日、久米宏が亡くなった。私は「久米宏 ラジオなんですけど」が好きだった。

酷暑8月にオリンピックを東京で行うことについて、委員会の面々を「彼らはオリンピックが好きなのであって、スポーツや選手たちには、何の興味も関心もない人達です」と正面切って非難していたのは、聴いていて痛快だった。

あの人のようなバイタリティがなければ、ニュースアナウンサーという職業は、早晚なくなってしまうのではないか。少なくともAIになれば、アナウンサーと芸能人とのトラブルは100%回避できる。昨年、フジテレビで起きたような大問題は、絶対に起こり得ない。

でもねえ…。

校長室で給食を食べていると隣の放送室から、ウグイスの様な、心地よいアナウンスが聞こえてくるのです。

あれを聞いていると、AIアナウンサーは、味気ないなあと思ってしまうのです。

そういう考えは、もう古いのかなあ…。